

世界で最も愛されているタロットカード



ウェイト=スミス・タロット物語

いま明かされる世紀のカードの成立事情



K・フランク・イエンセン=著

江口之隆=訳・解説



誕生100年後も全世界ベストセラーを走り続ける
驚異的タロット誕生秘話と数奇な運命のすべて

* 貴重な最初期版カード「パメラA・B・C・D」(「恋人」及び「太陽」札)世界初収録

* 画家パメラ・コールマン・スミスのタロット線描画78枚完全収録

ウェイト＝スミス・タロット

The Waite-Smith Tarot



1909年、英国・ロンドンのウィリアム・ライダー・アンド・サンズ社から
出版された78枚一組のタロットカード・デッキ。

「ウェイト版」「ライダー版」としても知られる。
神秘学研究者アーサー・エドワード・ウェイトと
画家パメラ・コールマン・スミスの二人によって生み出されたこのデッキは、
出版後100年以上を経た現在も、世界中のタロット爱好者や占術師たちを
魅了し、無数のリメイク・デッキを生みながら、
「世界で最も有名なタロット」として愛され続けている――



THE STORY OF THE WAITE-SMITH TAROT

By Frank Jensen

Copyright © 2006, K. Frank Jensen

Japanese translation published by arrangement with Witt M. Kiessling Jensen
through The English Agency (Japan) Ltd.

タロットカード掲載許可

Illustrations from the Golden Dawn Tarot, Hanson Roberts Tarot,

Universal Waite Tarot Deck®, Zolar's Astrological Tarot,

Gummy Bear Tarot and Golden Tarot reproduced by permission of
U.S. Games Systems, Inc., Stamford, CT 06902 USA.

Copyrights by U.S. Games Systems, Inc. Further reproduction prohibited.

The Universal Waite Tarot Deck® is a registered trademark of U.S. Games Systems, Inc.

アルフォンサス・リゴリを記念して

「タロットが体現するものは普遍的觀念群の象徴表現であり、その背後には人間精神が認めるあらゆる暗黙の了解がある。この意味において象徴表現には秘密教義が含まれているといえる。数多くの真理が万人の意識のなかに埋め込まれているが、通常の人間ではその認識を表現するには至っていない。わずかにとも真理を認識して現実的存在にしたもの、それが秘密教義である」

—— A・E・ウェイト著
『タロットの鍵—占術のヴェイルに隠された秘密伝統の断片』
1910年

まえがき



本書はウェイト＝スミス・タロットの複雑な歴史をその発端から語ることを試みる。ヴィクトリア朝英國に始まり、21世紀に至るまで、ほぼ100年間をカバーするのである。当初筆者は『ウェイト＝スミス・タロット全史』といった素人じみたタイトルを考えていた。しかし全史を語るなど当分不可能であると思い至ったのである。いまだ完結を見ていらない部分も山ほどあるのだ。オカルト関係の秘守義務の時代はまだ終わってはいない。ヴィクトリア朝の秘密結社の内情はこれまで何度も暴露されてきたが、新世紀の大量消費市場を舞台とするタロット出版社たちにも守るべき秘密が存在するのである。がっちりガードすべき経済的利益がある以上、質問をしても正直な回答は得られなかつた。ともかくも本書は2006年までの経緯を可能な限り徹底的に語るのである。現在の知識では答えが得られない疑問、あるいは答えを知っている人間が回答を拒むような疑問がある場合は、いつの日か調査が進むことを期待して疑問の存在を指摘しておいた。

本書は伝統的な意味における学術書ではない。無数の注釈と参照に囲まれて、片手で本文、片手で巻末の注釈を押さえて交互に読んでいくような書物ではない。すべての文章の出典を明記するようなこともしていない。たいていの場合、わたし自身が正確なソースを知らないのである。わたしはこの30年間、タロットと黄金の夜明け団といった本書のテーマに関する読書を行ってきた。使えると思える部分をあちこちからピックアップしたというのが実情である。本書の主要登場人物の一人、サー・エドワード・ウェイトと同様、わたしも学位を有する学者ではない。しかし秘教をテーマに文章を書く際は徹底的に事実に拘ることが肝要であるとウェイトも語っているし、わたしもこの点では同意する。わ

たしもウェイトと同じく、タロットのような曖昧なテーマに関する言論の山に対しては、生来の懷疑心を抱いている。

本書は4部構成となっている。第1部ではウェイト＝スミス・タロットを生み出した二人の主要登場人物、アーサー・エドワード・ウェイトとパメラ・コールマン・スミスを描く。かれらの来歴、タロット以外の業績、人生におけるあれこれを簡潔に紹介していく。ウェイトに関していえば、メインとなる資料は本人の自叙伝『走馬燈』とタロット関係の記述であり、それ以外には英國のウェイト専門家にして黄金の夜明け研究家のR・A・ギルバートが著した数冊の書物がある。ギルバートのウェイト伝『A・E・ウェイト—多彩なる魔術師』がなかったなら、ウェイト関連の記述はすかすかになってしまっただろう。ウェイトといえば一日中机にかじりついて無味乾燥な文章を書いていたるイメージがあるが、アーサー・マッケンがからむとそうではないという面白いエピソードもある。「驚異の年」と称されるかれらの放埒^{ほうらつ}の日々は（タロットは関係がないが）、ギルバートのウェイト伝でもそこそこあからさまに語られている。

ギルバートのおかげでウェイト関連の情報は容易に入手できたが、パメラ・コールマン・スミスの個人情報はそのあたりに浮かんでいるような代物ではなかった。わたしの主要な情報源は美術史家メリンダ・ボイド・パーソンズ博士が記した文章であり、また博士から頂戴した私信である。博士は1970年代にパメラ・コールマン・スミスに興味を覚え、修士論文のテーマとしている。パーソンズ博士の1975年の論文「パメラ・コールマン・スミスの再発見」、さらに1975年に博士が主宰したパメラ・コールマン・スミス美術展のカタログ『すべての信ずる者たちへ』が主要文献であり、これにスチュアート・R・カプランの『タロット百科事典』第3巻のエッセイが加わるが、カプランの情報源もまたパーソンズ博士の研究である。博士からはいろいろな記事を送っていただいたし、さらに現在進行中の博士によるパメラ・コールマン・スミス伝から適切な章

を読ませていただくという機会に恵まれた。メリンド・パーソンズ博士のご親切がなければ、本書におけるバメラ・コールマン・スミスの情報は凡庸なものになっていたであろう。

本書の第2部はウェイト＝スミス・タロット登場の背景となる19世紀末から20世紀初頭の英国タロット事情を扱う。またウェイトとスミスの両名が所属していたオカルト結社、黄金の夜明け団も紹介する。スミスは団の末端メンバーにすぎなかつたが、ウェイトはより深く関わっている。黄金の夜明け団に関する文献は無尽蔵といってよい。グーグルでちょっと検索をかけるとその莫大さは驚嘆ものである。しかしA・E・ウェイトと黄金の夜明け団の関係を論じるとなると、R・A・ギルバートの著作群を超える資料は存在しない。これにデッカー&ダメットの『オカルト・タロットの歴史』とダーシー・クンツの『黄金の夜明け研究』シリーズから詳細な部分を補足すればよい。

第3部と第4部は新たな資料となる。第3部はウェイト＝スミス・タロットそのものを扱う。初期のヴァージョン各種とその差異、20世紀中の変遷、1970年代に登場した新たなタロット商法、それによってタロットがマスマディア製品と化す様子を紹介する。このあたりの部分がいまだ完結を見ていないのである。わたしにとっては、いまだ納得のいく答えを得られていない分野といってよい。ゆえにわたしが遭遇した矛盾点や不確定要素、曖昧な部分を指摘するにとどめ、あとは読者自身の判断に委ねたく思う。著作権を扱う章の一部はスチュアート・R・カプランから得た情報をもとに記述しており、他の部分はさまざまなウェブサイトの情報をまとめたものである。

第4部はウェイト＝スミス・タロットの追従者たちの一覧である。^{ひょう}剽窃、リメイク、色の塗り直しなど、呼び方はいろいろである。第3部と第4部の執筆に際して、タロット収集家にしてウェイト＝スミス・タロット研究者であるホリー・ウォリーには大変お世話になった。わたしたち

はウェイト＝スミス・タロットの細かな点をさんざん議論し、この20世紀生まれのタロットに関する知識を積み上げていった。ホリーの後押しがなければ、わたしはおそらくこの種の細かい部分を飛ばしてしまい、あとから恥ずかしい思いをしたことだろう。ポール・フォスター・ケース（B.O.T.A.）とマンズ神聖団に関する情報の一部はデッカー＆ダメットの『オカルト・タロットの歴史』から得ている。

どのような人々が本書の読者になっていたただけるのだろうか？ タロットに興味はあってもタロットの歴史などどうでもいいと宣言する人々もいる。かれらはなにより「タロットリーダー」であって、過去など気にしないのである。わたしに言わせてもらえば、これはあまりに薄っぺらな姿勢であろう。タロットは無から生じたものではないし、タロットという現象を十分に理解するには歴史は重要なのである。わたし自身、カードリーダーではないし、タロットのそういった部分には特に興味がない。またわたしは過去30年間で発展したタロット産業を支持するものでもない。自分はある種の民俗学者であって、タロット界の奇妙な現象を記録しているつもりである。またわたしは長年にわたってウェイト＝スミス・タロットの名称が最初から「ライダー＝ウェイト・タロット」であったと信じていたのだが、これが某タロット出版社の営業上の都合によるものだと知るに至り、いまは大変気まずい思いである。この誤った名称を除去するという決意もまた本書執筆の動機の一つとなっている。わたしはこの30年間、タロットデッキとタロット本の批評を書き続けている。1980年代半ばから2000年末までに出版されたほぼすべてのタロットデッキをレビューしたといってよい。それは結構な数である。わたしは歯に衣着せぬ点で一定の評価を得ていて、それに関しては賛否両論あるのも認めよう。本書においてもわたしは同様のアプローチを採用している。本書は額面通り、20世紀において最も影響力を有したタロットの物語としてお読みいただきたい。1909年にこのデッキが創造されなかったら、今日のタロットはどのようなものになっていただろうか？

初期ウェイト＝スミス・タロットの各エディションに関する情報は以下の方々から提供されている。記して御礼申し上げる次第である。アメリカ合衆国のローリー・アマト氏。英國の故ジョン・ベリー氏。アメリカ合衆国、イェール大学バイネック稀観本手稿図書館ケアリー・コレクション。アメリカ合衆国のメアリー・K・グリーア氏。アメリカ合衆国のロンダ・ホウズ氏。日本のヤスヒコ・ヒロタ氏。アメリカ合衆国、U.S.ゲームズ・システムズ社、スチュアート・R・カプラン氏。オランダのサスキア・ヤンセン氏。英國のサイモン・ウィントル氏。

長年にわたって変わらぬ激励と支援をくださったアーネル・アンドー氏には特に感謝を捧げたい。また2002年にシカゴで開催された国際タロット協会の会合にわたしを招待し、初期ウェイト＝スミス・タロットの研究発表の機会を提供してくださったジャネット・ペレスにも感謝したく思う。本書の執筆はまさにそのときから始まったのである。

最後にタロット研究連盟（A T S）とジャン・ミッセル・デイヴィッドにも大いなる感謝を捧げたい。アメリカの複数の出版社が「儲からない」と判断した本書に出版機会を与え、この方面に興味を持つ世界中の人々にアクセスを可能としたのはまさにかれらなのである。

K・フランク・イエンセン

2006年6月 ロスキルドにて

目次

まえがき 4

第1部 ★ アーチストと著者

序章———	16
アーサー・エドワード・ウェイト———	20
ウェイトと宗教の関係	21
ウェイトの職業	22
著述業	23
出版社	26
オカルト・レヴュー	27
心靈術	28
アーサー・マッケンと「驚異の年」	31
ホーリックス社での勤務	33
パメラ・コールマン・スミス———	35
正規の美術教育	36
画家としての生活	39
演劇的人生	39
社交と友人関係	40
ジャマイカ民話	43
挿絵画家	45
出版事業	46
女性参政権運動と慈善活動	47
画業	48
黄金の夜明け	53
隠遁から孤立へ？	53

第2部 ★ ウェイトの黄金の夜明け

黄金の夜明け団	58
世紀の変わり目のタロット事情	70
黄金の夜明けタロット	71
生彩を放つウェイト=スマス・タロット	73
ウェイトの役割	76
愚者の配置	78
「正義」と「剛毅」の交換	80
「恋人たち」	82
「太陽」	82
ウェイトの小アルカナ	87
ケルト十字スプレッド	90
『鍵』とウェイトの秘密主義	90
永遠には守れない秘密……	93
ウェイト=スマス・タロット以降のウェイト	94
終焉	98
ウェイトのタロット関係著作	99

第3部 ★ ウェイト=スマス・タロット

印刷技術	102
初期のウェイト=スマス版	107
細部の比較	107
「恋人たち」	110
「太陽」	110
なぜ版によって差があるのか?	111
背模様	129
オリジナル・ライダー=ウェイト・タロット・パック(1993)	131
「太陽」の光線が意味するものは?	133

初期ウェイト＝スミス版に関する結論	135
バメラA	135
バメラB	136
バメラC	137
バメラD	137
『タロットの鍵』と『タロット図解』	139
いまだ残る疑問	141
第二次世界大戦後のウェイト＝スミス・タロット	144
ウェイト＝スミス・タロットの人気	149
著作権問題	153
エピローグ	160
バメラ・コールマン・スミスを顕彰する	160

第4部 ★ ウェイト=スマス・リメイクス——物語は続く
ウェイト=スマス・タロットに「インスピア」されたデッキ一覧(1911~2003年)

初期ウェイト=スミスのリメイク・デッキ——物語は続く—— 164
ド・ローレンス 165
聖堂の建設者(B.O.T.A.) 167
トムソン=レン・タロット 167
ヘンリエッタ・E・シュマント・タロット 168
ユニヴァーシティー・ブックス 168
ゾラーの占星術カード 169
自販機 タロット 170
ロイヤル・フェズ・モロッカン・タロット 171
ホーリー・オーダー・オブ・マンズ 172
ホイ=ボロイ 173
エインシャント・プロフェシー 173
メリマックのさまざまなエディション 174
ヘルス・リサーチ・ウェイト=スミス 174

ペアロット／ペア・タロット	175
3種類の日本製ウェイト＝スミス・タロット	175
限定版芸術作品——	177
AMA-kort エディション(デンマーク)	177
パメラが描いた肖像画群——ビクシー礼賛	178
リカラリング・デッキ群——	180
アルバノ＝ウェイト・タロット	180
ユニヴァーサル・ウェイト	181
ザ・ゴールデン・ライダー	182
過去20年間の大量生産品(1980～2003年)——	183
オランダのデッキ2種	183
ギリシャのウェイト＝スミス	183
ロシアのデッキ3種	184
音によるタロット探究	184
新たな配列を得るタロット	185
レナート・アンラスのタロット・ア・ラ・カルト	185
アダム・フロンテラス・タロット	185
ダイヤモンド・タロット	186
アメリカ・フォルチのミレニアム・タロット	187
タロット・ストラ	187
グミベア・タロット	188
イ・タロッキ・デラ・ジンガラ(ジプシー・タロット)	188
ウェイト＝デ・アンゲリス	188
タロット・オブ・ザ・ニューヴィジョン	189
コンパラティヴ・タロット	190
グロー・イン・ザ・ダーク・タロットと点字タロット	190
クイック・アンド・イージー・タロット	191
アファーメイション・タロット／エピキュリアン・タロット	191
ラディアント・ライダー＝ウェイト・タロット	191
ゴールデン・タロット	192

★ カラー図版

- 「太陽」細部比較図(子供) 113
「太陽」細部比較図(全体) 114
「恋人たち」細部比較図(全体) 116
「恋人たち」細部比較図(女性) 118
「恋人たち」細部比較図(天使) 120
トムソン=レン・タロット 121
ユニヴァーシティー・ブックス／ホイ=ボロイ・タロット 122
メリマック版タロット／ユニヴァーサル・タロット／ゴールデン・ドーン・タロット 123
ジャイアント・アルバノ／世界各国のウェイト=スミス版 124
バメラの雑誌『グリーンシーフ』表紙・挿画／ウェイト訳『ボヘミアンのタロット』／
ウェイト著『タロットの鍵』『タロット図解』 125
「愚者」(『タロット図解』／タロット・オブ・ザ・ニューヴィジョン／アフター・タロット) 126
グミベア・タロット／鳥タロット／日本神話タロット極 127
バメラが描いた肖像画群／タロット十字／ウェイト・ヴァリエイショナー 128

付録1 ★ ウェイト=スミス・タロット全78図版(大アルカナ・小アルカナ) 195

付録2 ★ 文献一覧 217

付録3 ★ ウェイト著『走馬燈』より、
ウェイト=スミス・タロットに関する記述の抜粋 227

日本語版特別付録 ウェイト著「タロット—運命の輪」 232

訳者解説 238

Special Thanks to
Witta M. Kiessling Jensen, Arnell Ando, Camelia Elias, Kenji Ishimatsu,
Darcy Kuntz, NORISAN, Naoki Yamamoto, Lo Scarabeo s.r.l,
Nichiyu Co.,Ltd and U.S. Games Systems, Inc.

第1部



アーチストと著者

Artist and Author

序章

1909年のクリスマス直前、ロンドンの書店の店頭に奇妙な物品が並べられた。かの都にはオカルトや神秘の素養を有する人々が多い。それまで文献等で「タロット」なる神秘体系を見聞してきた人にとって、恰好のクリスマスプレゼントが登場したともいえる。

問題の物品はいわゆる「改定版タロット」の初版である。オカルト作家アーサー・エドワード・ウェイトが原案を担当し、神秘文献専門の出版社ウィリアム・ライダー・アンド・サンズ（以下、ウィリアム・ライダー社）が出版している。

このデッキ登場の直前には、ウィリアム・ライダー社発行のオカルト雑誌『オカルト・レビュー』10巻12号にアーサー・エドワード・ウェイトの記事「タロット—運命の輪」が発表されている。

それまで英国ではタロットは入手が容易ではなかった。英國にはカードゲームとしての「タロット」を遊ぶ伝統がなかったから、タロットそのものが販売されることもなかったのである。英國のオカルト関係者がタロットに潜む秘教奥義を探究しようと思えば、デッキを自作するか、あるいは外国から輸入するのが普通だった。輸入元は主にフランスである。19世紀後半の英國のオカルトブームの発生源もフランスだったし、カードゲームとしてのタロットを遊ぶ伝統もあったからである。

ウェイトはその大仰な文体で次のように指摘する。「世にタロットの気配あり、と人は言う。されど英國のわれらがみな直面する苦難もある。タロットに関する話を読むばかりで、現物のデッキを手にするのが容易ではないのだ」。ウェイトの言は続く。「手に入るには劣悪なイタリアン・デッキばかりで、いやしくも研究者を自負する者であれば避けるにしかず」。運がよければフランスのエティヤ版を入手できるかもしれないが、「エティヤの幻想によって象徴体系が混乱している」とのこと。かわりにウェイトが推薦するのはフランスのマルセイユ版であるが、これもまたパリでもマルセイユでも入手が困難だという。「占いをする人の大多

数、及び占いを弄ぶのではなくきちんと研究する少數の人々が紙のカードとしてのタロットを欲している」のである。

このタロットの需要をウェイトが解決したという。「予期せぬ機会到来といおうか、タロットを一組デザインするという案件に際して敏腕にして独創的なる画家パメラ・コールマン・スミス嬢の関与を得る仕儀に至ったのである。同嬢はその明瞭なる天分に加えてタロットの価値に関する知識を有しておられる。おかげで世に知られぬ知識の回路につながる象徴体系を改定したいとするわたしの申し出にも耳を貸していただけたのである」。ウェイトの言はさらに続く。「かくして芸術と象徴体系は華燭の典を挙げ、真のタロットの誕生を見ることとなった。ただしタロットの真実は一つにあらず、多くの面を有するものと心得ていただきたい。これまでタロットに関して語られてきたこと、あるいはこれから語られるであろうことはどれも秘められた体系のごく一部にしか関係しておらず、正しい道を指示示すというよりはむしろ道を迷わす性質のものなのである」

ウェイト＝スミス・タロットを市場に送り出した出版社ウィリアム・ライダーは『材木取引ジャーナル』及び材木関係書籍の刊行で世に知られていた。しかし1908年、ライダー社はオカルト方面の出版事業をオーナーのフィリップ・ウェルビーから買収したのである。ウェルビーはこの時点でアーサー・エドワード・ウェイトの著作を数点刊行しており、刊行予定であった『秘められた聖杯教会』(1909) その他もライダー社が引き継ぐ形となつた。

さてクリスマスギフトとしてウェイトのタロットを買おうと決心した人々には、次なる選択が待ち受けていた。購入パターンが2種類だったのである。厚紙製の箱に入ったデッキ単体を購入するか、あるいはカードと同じサイズの教本『タロットの鍵—占術のヴェイルに隠された秘密伝統の断片』(ウェイト著、以下『タロットの鍵』) が同梱された箱入り版を購入するかである。この著作は判型こそ小さいが194ページもあるハードカバー本で、巻末20ページは参考文献一覧に費やされている。

本の奥付の発行年は1910年となっているが、市場に登場したのは1909年というのも奇妙な話である。デッキのみの定価は5シリング、『タロットの鍵』同梱版は7シリング6ペンスであった。ソフトカバーの『タロットの鍵』同梱版も7シリングで提供されていたが、この版はいまだ存在が確認されていない。

1909年の暗い12月の時点では、ウェイト＝スミス・タロットの刊行がどれほど意義のあるイベントであったのか、だれにも想像がつかなかつたであろう。このデッキがタロットのコンセプトを完全に変えてしまい、ありとあらゆるヴァージョンが世界中に無数に散らばっていくなど、実際の購入者が想像できるはずもなかった。直接告げても信じてもらえなかつたに違いない。

明らかにこのタロットの売れ行きは最初から順調だった。翌1910年4月には第2版が登場しているからである。この版はより良質の紙に印刷されることになり、デッキのみの定価は6シリングであった。

ライダー社の宣伝文句は単純なもので、「78枚一組のタロットカード」(A pack of 78 tarot cards)だけであった。発行元はウィリアム・ライダー社、カード出版における役割は製作費提供、印刷、マーケティング、販売、利益確保であるから、通常の書籍出版と変わりがない。どのタロットを出して同じことだったはずである。ライダーの役割はこのタロットの本質とは関係がないのだが、長年にわたってライダーという名前がつきまとっている。それももう終わりになろうとしている。ほぼ60年間にわたり、このタロットの箱にはなにも印刷されていないか、あるいは単に「ザ・タロット」とあるだけであった。皮肉なことに、「ライダー＝ウェイト・タロット・デッキ」という文字が外箱に印刷されるようになったのは1971年、このタロットがライダー社のもとを離れてU.S.ゲームズ・システムズ社(以下、U.S.ゲームズ社)に移ってからのことなのだ。U.S.ゲームズ社長スチュアート・カプランが著書『タロット百科事典』第3巻にてこう記している。「もともとライダー版と呼ばれていたこのデッキは1909年にロンドンのウィリアム・ライダー・アンド・サンズから発行されたものである」(下線筆者)。しかし1972年以前にそう呼

ばれていた証拠は一切ないのである。

もちろんライダーとウェイトに加えて第三の人物（実際は第四の人物もいるがそれは後述）がこのタロットに関わっている。それが画家のパメラ・コールマン・スミスである。彼女の名前はライダー以上に言及されてしまうべきなのである。ゆえに筆者は1990年以来このタロットを「ウェイト＝スミス・タロット」と呼称して創作者たちに敬意を表すようにしている。この名称は徐々に受け入れられているようである。

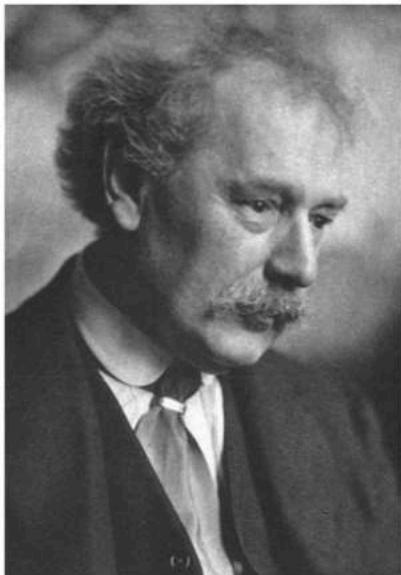
1909年12月のウェイト＝スミス・タロットの刊行はウェイトにとっても慶事であったと思われる。「改定版タロット」というアイデアがついに出版にこぎつけたからである。しかしタロットがこれほど容易に入手できるという状況になれば、秘してこそ華の秘教タロットを秘密のヴェイルに包んでおくことも困難になるとわかっていたはずである。できるだけ包んでおきたいというのがかれの本音なのである。パメラ・コールマン・スミスのほうは、印刷工程に不信の念を表明してはいたものの、自分の作品の出来にはそれほど不満があるわけではなかったようである。このデッキの刊行をもってその後100年間のタロット観が一変してしまうなど、ウェイトにもスミスにも、予見も想像もできなかつたにちがいない。

もちろん筆者はアーサー・エドワード・ウェイトには多大なる尊敬の念を抱いているが、ウェイト＝スミス・タロットがきわめて重要な存在となり、後発のタロット大多数の規準となったのは、ウェイトよりはむしろパメラ・コールマン・スミスとそのデザインによるものとの意見を抱いている。

アーサー・エドワード・ウェイト

アーサー・エドワード・ウェイトは1857年10月2日にニューヨークのブルックリンにて出生している。父親チャールズ・フレデリック・ウェイトは商船の船長であった。母親のエマ・ローヴェルは英国生まれだが、ウェイトの父親と正式に結婚していたかどうかは謎に包まれており、まざもって婚姻届は提出されていなかったと思われる。いずれにせよエマはチャールズの航海に何度も同行していた。しかし1858年9月のそれにはついていかなかった。アーサーの妹を妊娠中だったからである。この航海がチャールズ・ウェイト船長の最後の旅となった。1858年9月29日すなわちアーサー誕生からほぼ1年後、ウェイト船長は海難事故によって死亡してしまったのである。アーサーの妹の誕生は船長の死からわずか3日後であった。残されたエマは1年ほどアメリカのウェイトの実家に身を寄せていたが、現地のアッパーミドルクラスの生活が肌に合わなかつた。そこでアーサーと妹を連れて英国に戻ったのだが、こちらのミドルクラスの生活も彼女を歓迎するものではなかつたのである。

アーサー・エドワード・ウェイトの私生活はあまり知られていない。1938年には自叙伝『走馬燈—回顧的批評』が出版されているが、著者の個人的事柄、家族親戚関連、日常生活などはほとんど語られず、仕事や著作に関する記述が主となっている。自伝部分を記す際にも不正確な記述が多発している。もうほとんど忘れていたからであろう。自分の文書記録の管理もかなりいいかけんであり、そのあたりも『走馬燈』執筆時に触れている。「無駄を省く意味でも際限なく積み上がる文書群をふるいにかけて、いらな



アーサー・エドワード・ウェイト(1921年)

いものを廃棄するというのがわたしの意図であった。しかしこのままでは先送りしてきた作業を存命中に完遂する可能性がきわめて低いという確信が心中に生じつつもあったのである。さらに現在つきあいのある出版社からやいのやいのと催促されるため、やむなく最初期の書類箱を開くこととなった。そこに見つかったものは60年分の残滓ざんしであり、保管場所の湿気により腐敗しつつある遺骸いがいというか、媒体の崩壊によって第二の死を迎えるがよいと放置された文書群であった。わたしは、記憶は鉛筆より劣るとするグレイの格言を大いに称えて今に至っている。しかし崩壊しつつある破片や塵芥が放つ瘴気に直面するくらいなら、記憶に任せたほうがましという結論に達してしまったのである」



ウェイトの肖像写真

ウェイトと宗教の関係

アーサーは残りの人生をすべて英国で過ごしている。1863年には国教会の信者であった母親が知り合いのドミニコ会修道士を通じてカトリックに入信したため、アーサーは敬虔なカトリック教徒として成長し、少年時代は教会の儀式等を手伝う堂役どうえきを務めていた。しかしアーサーの16歳の誕生日直前の1874年9月、妹フレデリカ・ハリエットが猩紅熱しょうこうねつで死去してしまった。アーサーは落ち込み、最終的にカトリックに対する信仰を失っている。かわりに若年にして神秘体験を追求するようになり、心霊術やオカルティズムにも接している。ウェイトはこういった方面に興味を有してはいるが、一生を通じてきわめて懐疑的でもあった。かれの生涯の追求は神秘的ヌミノースとの合一であり、換言すれば靈的王国の発見であった。かれの根底にあるものはキリスト教であり、カトリック教会のみが正統なキリスト教形態であるという発想であった。カトリック教会の典礼や儀式に心惹かれているが、同様のものを秘密結社

のなかに再発見してもいる。しかし魔法結社などはかれの不断の追求を満足させるものではなく、薔薇十字やフリーメイソンリー方面に参加してもそれは同様であった。

最初の頃はカバラを学んでいたが、のちにウェイトは聖杯伝説とその象徴体系に関心を寄せている。そしておそらくかれの最重要の作品である『秘められた聖杯教会』はウェイト＝スミス・タロットと同年の1909年に出版されたのである。

ウェイトの職業

ウェイトは作家、詩人、批評家、翻訳家になる運命を背負っていて、その出発も早かったといえる。少年期から通俗冒険小説に夢中になり、『英國少年』という児童雑誌に冒険ものを寄稿するほどであった。最終的には『ペニー・ドレッドフル』というパルプ雑誌の専門家になり、この見捨てられがちなジャンルに関するエッセイを何本も書いている。20歳の頃には『トム・トゥルーハート、あるいは家出少年の運命』なる小説を発表するに至った。この種の文学に対する興味は晩年まで続いており、膨大なコレクションを形成するほどであった。「『影なき騎士』や『ロンドンの40人の盗賊』といった小説に出会わなかったら、オカルト方面に足を踏み入れることもなかっただろう」とウェイトは晩年に述懐している。

ヴィクトリア朝の文学環境にあっては、詩歌はあらゆる作家が一度ははある必需品というか表現手段であり、ウェイトも例外ではなかった。妹の死後、かれは詩を書きたいという衝動にかられていた。シェリーが18歳で『クイーン・マブ』を書いたという事実を知ったのも大いに刺激となっていた。ウェイトの詩歌への最初の挑戦は平凡な結果に終わったが、18歳のときに書いた『占星術に寄せて、及び他の詩』は限定100部の自費出版にまでこぎつけている。その後は幾多の詩を文芸誌に寄稿し、自ら『ゴールデン・ペン』という文芸誌の編集者にもなっている。青年時代には著名詩人ロバート・ブラウニングに助言を求め、それを頂戴している。もっとも助言に感謝はしたが、いつも従うというわけでも

なかった。詩歌の創作衝動はウェイトの一生につきまとっており、発表もしている。1914年に出版されたかれの『詩集』は356ページに及んでいる。

1884年、ウェイトの署名が入った最初の文芸批評記事（詩人リチャード・ラブレイス関連）が『ジェントルマンズ・マガジン』誌に掲載されている。『ヤング・フォーカス・ペーパー』にも記事を書いていたが、それで定収入を確保するのは不可能である。ウェイトは長年にわたり母親から財政援助を受ける身の上であった。

しかし1885年、28歳のとき、ウェイトは『ブリティッシュ・メイル』という雑誌の編集職をオファーされている。これにはかれもびっくりしたであろう。出版関係の経験はなかったが、ありがたく受けることにした。『走馬燈』ではこのあたりを記していわく「毎号、既存の雑誌から記事を借用するだけだった。この慣行は全方面から^{かんじょ}寛恕されていたのであろう。わたしは2年半もの間、編集に携わり、その間に非難の言葉を一言も聞いたことがなかったからである。当時は一軒のパン屋が著作権をめぐってひと月に12件もの著作権訴訟を起こす時代であったのだ。ブリティッシュ・メイル誌の編集室はストランドのキャサリン・ストリートに所在していて、ジャーナリズムに関するかぎりわたしの日々は静穏そのものであり、とりたてていうほどの残業もなかった。コラムは盗用ではなく、農業会館やクリスタルパレスで行われる青果業、醸造業といった方面的展覧会や新発明のレポートが主であった。もっとも、楽ができたのは事業の背後に峻厳なる監督者がいなかったからである。ホレイショ・ボトムレイもアルフレッド・バーシー・シネット（雑誌のオーナーたちであり、シネットは神智学協会関係者にしてウェイトの友人）も、そして編集の席にいるわたしも、ジャーナリズム事業のことなどろくに知らなかったというのが実態であった」。

著述業

ほぼ同時期、ウェイトは処女作に取り組んでいた。フランスの隠秘书

パメラ・コールマン・スミス

パメラ・コールマン・スミス、洗礼名コリンヌ・パメラ・コールマン・スミス、友人の間では「パム」あるいは「ピクシー」として知られる女性が1878年2月16日、アメリカ人の両親のもと、英国はロンドンにて出生している。母親（旧姓コリンヌ・コールマン）と父親チャールズ・エドワード・スミスはともにブルックリンの有力家系の出身である。母方の祖父は出版業者であり、その妻は児童書の著者（夫が出版）であった。パメラの母は若い頃は熱心なアマチュア女優であり、その兄すなわちパメラの伯父はムーア風建築物とヴェニスの船舶の絵で当時有名だった画家サミュエル・コールマンである。もう一人の伯父ウィリアム・コールマンはニューヨークにおける最初の画廊のオーナーであった。パメラはコールマン一族から神秘オカルト系への関心も引き継いだといえるかもしれない。コールマン家は何代にもわたってスウェーデンの哲学者にして幻視家エマニュエル・スウェーデンボルグの信奉者だったからである。

パメラの父方の家系も芸術方面にまったく無縁というわけではない。父親は長年にわたって日本の浮世絵を収集し、一大コレクションを築き上げていた。その弟のセオドアは東洋の敷物と希少な陶磁器の愛好家にして収集家である。祖父もまた画家だった。曾祖父もその妻も児童書を執筆しており、その兄弟には版画印刷業者にしてニューヨークの画廊のオーナーという人物もいる。

1904年11月の『ブルックリン・ディリー・イーグル』紙にパメラの様子が紹介されている。「ブルックリンにおける彼女は常に奇妙な存在



パメラ・コールマン・スミス

であった。通常の女性とはかけ離れているのである。服装も奇妙なもので、不気味な原色を好んでいる。彼女はよくハワード・ハウスに顔を見せていたが、父親の存命中も没後も渡り鳥のような存在だった。普通の上流階級の家庭に収まって幸せになれるような人ではない。ブルックリンはこういった人物が山の手のど真ん中から飛び出してくる点が面白いのである」

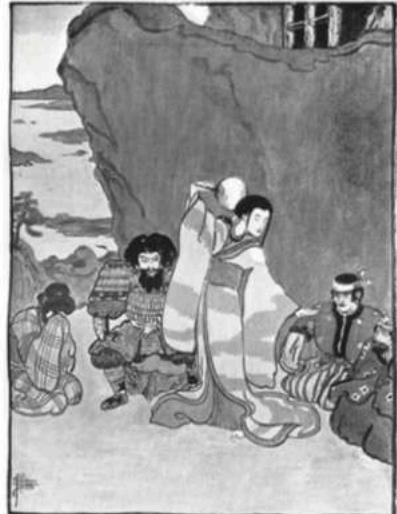
本人自身の弁によれば、パメラは幼少時を英国で過ごしたという。父親が有名な室内装飾会社ニコスル・コルショウに勤務しており、同社のニューヨーク代表でもあったからだという。その後、ジャマイカ鉄道に籍がある友人の紹介で西インド開発会社の監査官という職を引き受けた。これはすなわち一家がロンドン、ジャマイカ、ニューヨークを転々と旅行して回ることを意味した。パメラいわく、10歳までは英国で暮らし、その後の1893年から1899年まではニューヨークに住んだとのこと。別の情報源によれば、パメラは少なくとも一時期ジャマイカで成長し、黒人の乳母に育てられたとされる。この乳母から地元の民話や伝説を聞かされ、大いに影響されたというのである。詳しい事情は文献的裏付けがないが、1896年にジャマイカで亡くなったパメラの母に関する言及が非常に些末的であるという点は指摘できる。このあたりからパメラが実は父親の子供ではあっても母親のそれではないという推測がなされるのである。パメラのカリブ海的な風貌も手伝い、養子説、婚外子説も考えられる。アメリカの白人夫婦からパメラのような顔つきの子供が誕生するのは普通ではないといえるかもしれない。彼女は東洋人、黒人、日本人、あるいは混血などと描写されてきた。ともあれ母親に関する詳細があまり知られていない一方、父親とは非常に近しい関係にあったという事実は残っているのである。

正規の美術教育

1893年、15歳のパメラはニューヨークのプラット美術学校に通いはじめた。同校は1887年に創立しており、現在も存続している。プラット校は今までいう「商業美術」を教える最初の美術学校でもあった。構

図、線画、油彩などのクラスが開講されており、およそ美術で身を立てるのに必要と思われる分野をほとんどカバーしていた。とりわけ重要だったのは、いかなる原画も最終的な再現技術に依存していて、アーチストはその限界を認識して調整すべきであると学生に教授していた点である。パメラは数年でプラット校を去り、1896年にはジャマイカを再訪している。そしてこの年、母親が死去してしまった。

プラット校時代のパメラの指導教官の一人がアーサー・ウェズリー・ダウである。フランスで美術を学んだダウは当時の画壇の重鎮であったが、それ以上に日本美術に大いに傾倒する美術教師であった点が重要である。ボストン美術館の日本美術主任アーネスト・フェノロサによって紹介されたジャポニズムはこんなところにまで影響を及ぼしていたのである。ダウは色彩の調和、陰影の省略、前景と背景への同等の注視といった日本美術の美点を強調する。絵画は目に見える音楽であり、色彩と線描は音楽と同じくそれに接する者のなかに強力な感情的反応を喚起するのである。ダウはまた「総合理論」を提唱する。構図は写実を表現するのではなく、抽象を強調する調和的かつ音楽的なものであるべきというのである。かれは学生に対して日本の浮世絵とその明るい色彩を研究するよう奨励していた。パメラは父親が膨大な浮世絵コレクションを所有していたこともあり、すでに十分なじみのある分野といえた。浮世絵の影響はパメラのイラスト全般そしてウェイト＝スミス・タロットにも大いに見てとれるのである。



上・貞奴(サダヤッコ)。背後の髭武者は川上音二郎。パメラによる、貞奴一座の公演批評用のイラスト 下・『クリティク』誌掲載のパメラの戯画的自画像

第3部



ウェイト=スミス・タロット

The Waite-Smith Tarot Deck

初期のウェイト=スミス版

頻繁に発せられる質問が二つある。「最初のウェイト=スミス・タロットはどのようなものだったのか?」そして「もともとの色はどんな様子だったのか?」

かつてはこれらの質問にははっきりした回答が得られなかつた。初期ウェイト=スミス・タロットの細かな特徴などだれも気にしていなかつたからである。筆者は長年にわたつてこれぞウェイト=スミス・タロットの初版であろうと思われるデッキをコレクションしていた。なぜ初版と思ったかといえば、明らかに古びていて、第二次大戦後に出了した版やU.S.ゲームズ社の版とはまったく異なつていたからである。全体的な外見はもとより、印刷されているカードの紙質からして違つていていた。その後、やはり初期のものと思われるウェイト=スミス・デッキを入手したところ、多くの点で前から持つていたものとまったく違うことが判明した。すなわち筆者は調査を必要とするテーマを発見したのである。

手元にある2個のデッキを比較すると、すべてのカードで差異が見つかった。とりわけ「恋人たち」と「太陽」では差異がきわめて顕著であつたから、筆者の調査はまずこの2枚に集中することとなつた。初期ウェイト=スミス版を持っている知り合いのタロット収集家やタロット愛好家に手紙を出し、「恋人たち」と「太陽」のカラー拡大写真を送つてほしいと頼む一方、その種のデッキをカタログに載せている博物館や図書館等にも依頼したのである。偶然というべきか、筆者が選んだ2枚のカードは、ウェイト=スミス・タロットの大アルカナのなかで従来のタロット図像、たとえばマルセイユ版などから一番かけ離れた意匠を有するものたちであった。

細部の比較

鍵となる2枚のカード「恋人たち」と「太陽」にあって、とりわけ注意を払うべき細部は、メカニカルなアミの部分(現代ならスクリーン部)

がドットか、斜線か、両者の混合かという点である。「恋人たち」は特にこの点で注意が必要である。二名の人物の肌色を出すために使われているアミが明確に見てとれるし、背景の山のクロスハッチング（手作業）が比較検討に最適だからである。

「太陽」が比較検討対象に選ばれたのは、このカードが各エディションの最も顕著にして重要な差異を示しているからである。すなわち「太陽光線の半分」のような余分な波線がローマ数字「XIX」の右側に描かれている。この波線の意味はあれこれ推測されているが（後述）、『オカルト・レビュー』誌 1909 年 12 月のウェイトの記事「タロット一運命の輪」につけられたイラストの時点ですでに存在する。この記事はウェイト＝スミス・タロットの発売直前に記されたもので、初めて公表されたカードデザインということになる。奇妙な特徴としては、『オカルト・レビュー』の記事についている「太陽」の絵はその番号が XIX ではなく XVIII になっているのだ。ダーシー・クンツの『黄金の夜明け研究シリーズ』（1996 年第 8 号）にある記事の再録では、残念なことにこのミスが修正されている。すなわちクンツの再録にあるイラストはオリジナルの雑誌記事からリプリントしたものではないということである。

問題の波線は 1911 年刊行（実際は 1910 年末には発売か）のウェイトの著書『タロット図解』ウィリアム・ライダー社（後述）の挿絵にも存在する。1918 年の L・W・ド・ローレンスによるウェイト本の海賊版である『タロット絵解き』（しかもアメリカ合衆国内においてローレンス名義で出版、これに関する後述）にも見られる。波線は若干の違いはあるものの、一つの例外を除いてすべての初期ウェイト＝スミス・デッキに発見できるのである。

「太陽」に関する他の明白な差異部分としては、タイトルの位置と句読点、右手の旗とヒマワリの斜線があげられる（デッキ全体としても差異部分は無数にある）。

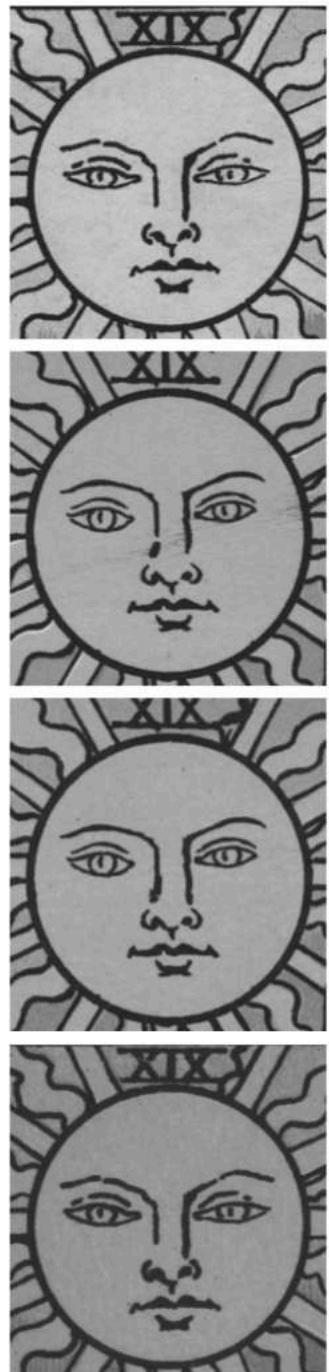
各デッキの比較に際しては、以下の諸点が同一か否かを考慮に入れる必要がある。まずカードのサイズと、さらに 1 パックの厚みが重要である（厚みに差があるのは使用された紙が異なっていることを示す）。カーペンターハウス

ドの寸法は摩耗やトリミング方法の差によって若干の差が生じるため、わずかな差は許容範囲となる。

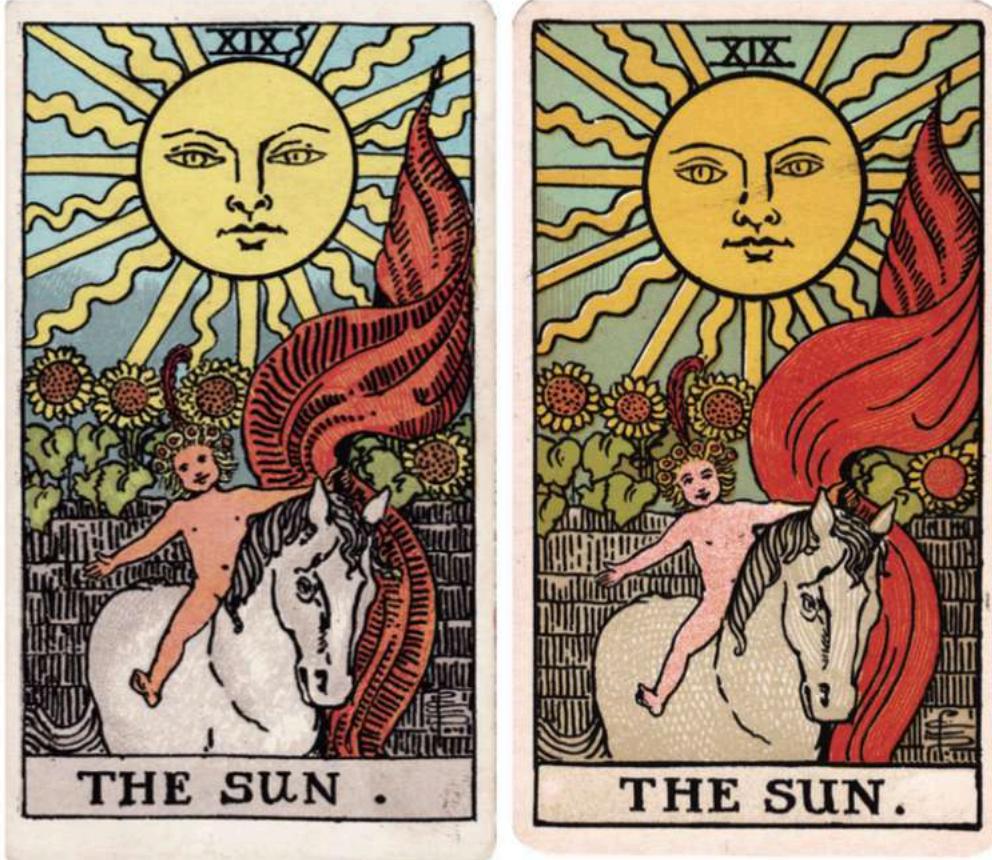
鑑定作業においては、色彩の濃度とバランスも重要なファクターとなるが、前述のカードの寸法や厚みに較べれば重要度はやや落ちる。発色などは同じプリントランでも異なってしまう場合がまあるし、こういった部分は印刷所の見識と技術に依存しているからである。また、筆者はすべての初期ウェイト＝スミス・デッキを直接肉眼で鑑定したわけではない。送ってもらったカラーコピーでは、程度の差はあるが色彩の正確な再現性は保証されていないのである。

筆者の調査期間中に、少なくとも4種類の初期ウェイト＝スミスが浮かび上がってきた（この場合の初期とは1909年から1940年頃までを指す）。以下、問題の4種類をパメラA、パメラB、パメラC、パメラDと呼称する（あるいはパムA、パムBといった調子で略す）。A、B、C、Dは筆者が発見した順番につけた記号であって、出版の時期や順番を示すものではないことを理解しておいていただきたい。

（筆者は以前に発表した記事で5種類のエディションがあると書いてしまった。パメラEという表記も紹介してしまったが、後日これはド・ローンスの初版であると判明している。詳しくは第4部を見よ）

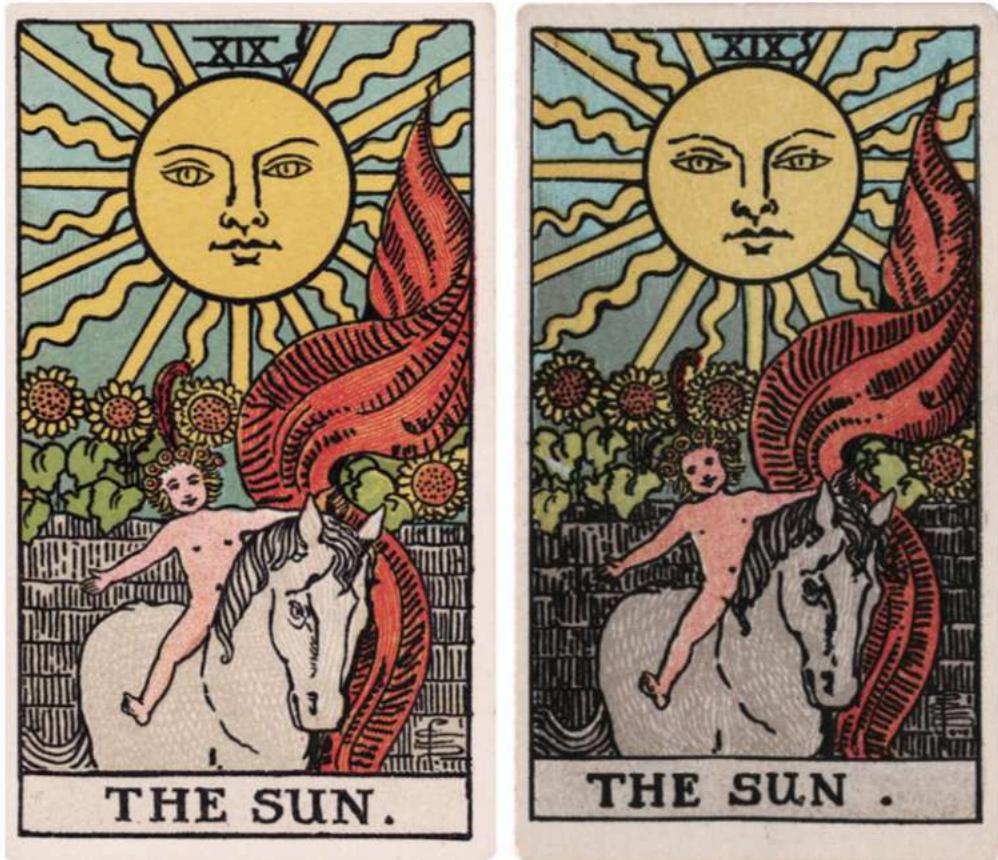


「太陽」細部比較図（太陽の顔）
上からパメラA、パメラB、パメラC、
パメラD



「太陽」細部比較図(全体)





著者

K・フランク・イエンセン

K. Frank Jensen

1933年、デンマーク、コペンハーゲンにて出生。少年時代はドイツ占領下のデンマークで過ごす。終戦後は行政方面の勉学に励み、成人後はコペンハーゲンの市役所勤務。電子計算機やコンピューター方面のスキルも習得。教育方面の出版実務等に携わる。イエンセン氏のタロットに対する関心は1970年代初頭に始まったという。1975年には黄金の夜明け系のタロット書を発表（同書はデンマーク語で書かれた最初の魔術系タロット本だったという）。その後、次々とタロットや関連本を世に問う。同じく1975年に氏は「遊戯研究室」を立ち上げ、タロットカードや占い用カードの収集、分類、分析、保管を開始している。以来30年余をかけて形成された氏のコレクションと人脈は比肩するものがなかった。とりわけ近代タロットの収集は徹底したものであり、20世紀中に作られたタロットの95パーセントを押さえたと言われている。収集の傍らさまざまなメディアで執筆や発表を行い、とかく曖昧あるいは虚構が忍び込みやすいタロット界にあって常に物証をもって発言し、斯界の常識的議論に大いに貢献している。1989年から1997年にかけてタロットと占いカードを専門に扱う研究誌『マンティア』の編集発行人となり、全16号を刊行。この段階で初期ウェイト=スミス・タロットの分類と研究が始まっている。2002年、国際タロット協会より功績賞を贈呈される。2016年9月7日、他界。享年83歳。氏の収集物は現在ロスキルド大学図書館に収蔵され、氏の名前を冠して「K・フランク・イエンセン・コレクション」と称されている。

訳・解説

江口之隆

えぐち・これたか

1958年、福岡県生まれ。魔術研究家、翻訳家。1983年、日本初の黄金の夜明け団の歴史書『黄金の夜明け』（共著、国書刊行会）を上梓。1984～85年にかけて英國・ウォーバーグ研究所で夜明け団研究を行う。主な著書に『黒魔術・白魔術』（長尾豊名義、学研）、『西洋魔術図鑑』（翔泳社）など、訳書にリガルディー編『黄金の夜明け魔術全書』、クロウリー『新装版 777の書』（国書刊行会）、シセロ夫妻『[黄金の夜明け団]入門』（ヒカルランド）などがある。Webサイト・Twitterアカウント「西洋魔術博物館」を主宰。魅惑的な西洋魔術の世界に関するウィットに富んだ情報発信が幅広い層の人気を呼んでいる。<http://www.elfindog.sakura.ne.jp/>

ウェイト=スマス・タロット物語

いま明かされる世紀のカードの成立事情



第一刷 2019年2月28日

著者

K・フランク・イエンセン

訳・解説

江口之隆

発行人

石井健資

発行所

株式会社ヒカルランド

〒162-0821 東京都新宿区津久戸町3-11 TH1ビル6F

電話 03-6265-0852 ファックス 03-6265-0853

<http://www.hikaruland.co.jp> info@hikaruland.co.jp

振替 00180-8-496587

ブックデザイン・DTP

鈴木成一デザイン室

校正

麦秋アートセンター

本文・カバー・製本

中央精版印刷株式会社

編集担当

児島祥子

落丁・乱丁はお取替えいたします。無断転載・複製を禁じます。

©2019 Eguchi Koretaka Printed in Japan ISBN978-4-86471-700-7